

公益財団法人日本バスケットボール協会

2019 年度事業報告

<事業の概況>

2019 年度の公益財団法人日本バスケットボール協会は、2018 年度に引き続き、『JAPAN BASKETBALL STANDARD 2016』（以下、JBS2016）を機軸とした新たな方針・改革路線の実行と、「Break the Border」の精神のもとに、バスケットボール界全体の体制改編・強化の 2 点を基本方針として事業を行った。その中でも重点実施事項は、下記の 4 点であった。

- (1) 組織改変方針/新登録制度/D-fund 制度の実施とバスケット界全体の組織基盤（ガバナンス）の強化
- (2) ワールドカップ・東京オリンピックに向けた代表チームの強化と、審判/指導者/マネジメント人材の育成・強化
- (3) バスケットボール競技の価値向上に向けたマーケティング戦略の推進と拡大（B.MARKETING 社と協働）
- (4) JAPAN BASKETBALL OFFICE の体制構築および機能強化/人材の育成・強化

また、本年度は世界中で猛威を振るった新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、JBA の 2019 年度終盤に開催を予定していた多くの事業の中止を余儀なくされた。

(1) 組織改変方針/新登録制度/D-fund 制度の実施とバスケット界全体の組織基盤（ガバナンス）の強化

2019 年 6 月 10 日にスポーツ団体ガバナンスコード〈中央競技団体向け〉が、8 月 27 日にスポーツ団体ガバナンスコード〈一般スポーツ団体向け〉がスポーツ庁により策定された。JBA としてはバスケットボール界全体の組織基盤のさらなる強化と適正なガバナンスの確保を図るため、これを適切な組織運営を行う上での原則・規範として、自ら遵守すべき基準の作成を進めている。本年度においては、適切な組織運営を確保するための役員等の体制を整備するため、理事および会長の任期について基本規定をはじめとする諸規定の改定を行った。今後行われるスポーツ団体ガバナンスコード適合性審査やその進捗に関する自己説明およびその公表に向け、規定や組織体制のさらなる整備を進めていく。

一方、2018 年度に導入された新登録制度体系、同時に導入された D-fund 制度は 2 年目を迎え、制度の安定運用に向けた取り組みを行っている。都道府県協会における作業面における煩雑さの解消や問い合わせ内容などを考慮し、その対応の向上を図っている。さらに、バスケットボール界の規律事案、裁定事案に対処するために 2018 年度に推進した規律規程・裁定規程の整備と規律委員会・裁定委員会の設立については、JBA と都道府県協会の連携により、一定の成果を上げつつある。

新しい制度の定着には多少の時間が必要と考えられるが、着実に遂行することにより、バスケットボール界のガバナンス強化を図っていく所存である。

(2) ワールドカップ・東京オリンピックに向けた代表チームの強化と、審判/指導者/マネジメント人材の育成・強化

2019 年 6 月に行われた NBA のドラフト会議で、八村塁選手が 1 巡目 9 位でワシントン・ウィザーズから指名を受けた。このニュースは日本でも大きく取り上げられ、それ以降、八村選手の動向は逐次報道されることになり、一気にバスケットボール界のスター選手となった。

八村選手や渡邊雄太選手（メンフィス・グリズリーズ所属）を擁する男子日本代表チームは 8 月に開催された「バスケットボール日本代表国際試合 International Basketball Games 2019」において、世界の強豪チームであるニュージーランド、アルゼンチン、ドイツ、チュニジアと対戦し、その後、中国で開催される FIBA ワールドカップ 2019 に臨んだ。大会の結果は予選リーグ 3 戦全敗となったが、2006 年大会以来のワールドカップに出場し、世界の壁を体験することで、東京オリンピックに向けた強化活動への課題を洗い出す機会となった。

一方、女子日本代表チームは、本年度最も重要な大会と位置付けていた「FIBA 女子アジアカップ 2019」で優勝を果たし、目標としていた 4 連覇を達成した。すでに開催国枠として東京オリンピックへの出場が決まっているが、11 月（アジア

ア・オセアニア予選)と2020年2月(世界最終予選)に行われた各オリンピック予選に出場し、さらなる国際経験を積みながら強化を進めた。

東京オリンピックから正式種目となった3×3は、当初はFIBAより男女とも出場権を獲得したと伝えられたものの、その後IOCに認められず、女子は出場権獲得のための予選大会に出場し、オリンピックの出場権を獲得しなければならなくなった。10月に行われた「FIBA 3×3 U23 ワールドカップ 2019」において3×3女子U23日本代表チームは初優勝を果たし、オリンピック出場権の獲得を目指すトップチームの強化へつなげる成果を上げることができた。

本年度は東京2020オリンピックへ向けた強化活動が順調に行われてきたが、新型コロナウイルス感染症の世界的な蔓延により、2020年3月24日に東京2020オリンピックの1年延期が決定した。そのため、2021年夏に開催される東京オリンピックに向けた強化活動計画の大幅な修正が必要となった。

審判および指導者に関しては、ライセンス制度の刷新と定着を着実に実行し、また各種養成プログラムの充実を図ることにより、ライセンス取得者数はここ数年で大幅に伸びている。JBAが進めている審判及び指導者養成の取り組みは、バスケットボールの普及・育成・強化のための基盤づくりにおいて、着実に歩を進めている。

(3) バスケットボール競技の価値向上に向けたマーケティング戦略の推進と拡大 (B.MARKETING 社と協働)

JBAはB.MARKETING(以下、BMK)株式会社との協働により、男女日本代表戦、天皇杯・皇后杯、ウィンターカップをはじめとするJBA主催の全てのバスケットボール競技大会の価値向上を図っている。本年8月にさいたまスーパーアリーナで開催された「バスケットボール日本代表国際試合 International Basketball Games 2019」では、アルゼンチン戦に16,221名、ドイツ戦には18,355名が集まり、過去にない集客と盛り上がりを見せる大会となった。また、ウィンターカップは史上最大数の男女各60チームが参加する大会となり、2会場で開催され、男子決勝戦については地上波による生中継を実現することができた。さらにNBAプレーヤーである八村選手、渡邊選手をはじめとする日本代表選手や高校生ながら特別指定選手としてB1入りした河村勇輝選手らの各メディアにおける露出機会が増え、バスケットボール選手の知名度が大きく向上することとなった。

BMKへの収益事業の集約と人員の充実に向けて再構築を進めている成果が表れ始めており、2020年度以降、より一層のマーケティング戦略の推進と拡大が期待される。

(4) JAPAN BASKETBALL OFFICE の体制構築および機能強化/人材の育成・強化

本年度は、JBA、公益社団法人ジャパン・プロフェッショナル・バスケットボールリーグ(以下、Bリーグ)、BMK、一般社団法人ジャパン・バスケットボールリーグ(以下、B3リーグ)が共同で設立した「バスケットボール・コーポレーション株式会社(以下、BCP)」が本格稼働を始めた。BCPは上記4団体をつなぐハブの機能を有する会社として、競技統括団体、リーグ、事業会社を一つにまとめる機能を果たし、バスケットボール界をさらに発展させることを目的としている。4団体の職員はBCPに転籍し、オフィスのフリーアドレス化、就業規則・決済ルール・人事評価委制度などの統一を進め、また人材交流・人材育成・人材登用などを行うことで、バスケットボール界の一体化を図りながら、マネジメント人材の育成や組織強化に努めていく。

2020年3月、中国を発端とする新型コロナウイルス感染症の拡大により、JBAは主催事業を原則中止または延期とし、また都道府県協会における主催事業についても原則として中止または延期を要請することとなった。JBAの主な主催事業として、2月にホームで開催を予定していたFIBAアジアカップ2021予選(vs.中国)、3月下旬に開催を予定していた全国U15バスケットボール選手権プレ大会、第51回全国ミニバスケットボール大会などが中止を余儀なくされた。また、JBAのオフィスワークについては原則としてリモートワークとし、WEB会議の開催、インターネットアプリケーションの積極利用などの業務推進を行った。

<活動報告（概況）>

I 日本代表関連

1. 男子日本代表概況

男子強化の 2019 年度最大の目標は、FIBA バスケットボールワールドカップ 2019 において予選リーグを突破しベスト 16 以上に進出すること、そして東京オリンピック開催国枠を自力で獲得することであった。すなわち予選で 1 勝を挙げることがその壁を破るための条件でもあり、これまでヨーロッパのチームに勝った経験がない日本の大きな挑戦でもあったと言える。

大会に臨むメンバーは、NBA プレーヤーの八村塁・渡邊雄太、帰化選手のニック・ファジーカスというチームの柱となる強力な選手を中心に、日本国内プロリーグトップの 9 名を加え、今までにない最強の 12 名で予選リーグにてトルコ・チェコ共和国に対し勝利を掴むべく挑んだが、ヨーロッパの壁は厚くゲーム終盤に力が及ばず敗退。そして続くアメリカにも敗れ下位リーグへ進むこととなり、目標に掲げていたベスト 16 進出への道は絶たれた。その後の順位決定戦では予選で負傷した主力の欠場が響き、ニュージーランド、モンテネグロにも勝利することができずワールドカップを全敗で終えた。まさに世界でもトップレベルの実力を持つ大陸、アメリカ・ヨーロッパとの対戦経験が乏しく、それら強豪国との国際マッチでの経験値不足が露呈した大会でもあった。

FIBA ランキングが 48 位であった日本が、予選で 4 連敗から 8 連勝の偉業をなしワールドカップ出場を成し遂げたことは国際連盟から高く評価され東京オリンピックの開催国枠獲得に繋がったが、それと同時に積み上げた強化施策がなければ、世界のトップレベルには台頭できないという事実にぶつかった。

また、2020 年 2 月からは 2021 年のアジアカップに向けた予選がスタート。新型コロナウイルス感染拡大の影響により初戦の日本での中国戦は延期となったが、アウェイで行われたチャイニーズ・タイペイ戦では NBA 所属の選手の招集は見送ったものの、新たに加入した選手の活躍もあり快勝。アジア大陸においては着実に実力を伸ばしている。

一方アンダーカテゴリーにおいては、一気通貫の強化体制を継続的に進めている。これは将来の WC・五輪での戦いにも続く世界強豪国との戦いの準備となり、若い世代からトップチームの考え方や世界基準のポジションでのプレーを導入することで、年代枠を越えて選手がレベルアップできるシステムである。またシニア代表のアシスタントコーチをアンダーカテゴリーのヘッドコーチに配置することにより、トップカテゴリーの戦略戦術をはじめ、代表として「勝つため」に必要なメンタリティ強化、世界のスタンダードとなる戦い方を落としこむ流れが徐々に見始めている。当初の計画では 2019 年度に FIBA U16 アジア選手権大会が予定されていたが、FIBA アジアの実施計画の遅延に加え新型コロナウイルス感染拡大の影響で、2019 年度内の大会実施ができず 2020 年度へ延期となった。

<主な国際大会の成績>

- ・ FIBA バスケットボールワールドカップ 2019（中国・北京ほか 7 都市） 31 位
- ・ FIBA アジアカップ 2021 予選 Window1 ①vs 中国代表（延期）②vs チャイニーズ・タイペイ代表（勝利）

2. 女子日本代表概況

2019 年度の女子日本代表は FIBA が新たな試合方式の導入を開始したため、FIBA アジアカップ（9 月）に加え、FIBA 女子オリンピック予選（11 月）、FIBA 女子オリンピック予選（2 月）といった 3 大会への出場が必要となった。出場大会数拡大に加え、11 月、2 月といったリーグ開催期間中の日本代表活動実施は初の試みであった。4 月の活動開始時には 26 名の日本代表候補選手を招集し、長期の代表活動を支えるチームの基盤を作るとともに、国内合宿、海外遠征並びに 5 月にベルギー、8 月チャイニーズ・タイペイを迎えた国際強化試合「2019 三井不動産カップ」での計 4 戦を全勝で終えて、4 連覇がかかる 9 月の FIBA アジアカップ出場に臨んだ。

FIBA アジアカップには渡嘉敷、本川がリオ・デ・ジャネイロオリンピック以来 3 年ぶりの代表復帰。予選ラウンドを順当に全勝で勝ち抜けると、準決勝オーストラリア戦、決勝の中国戦も逆転で勝利を飾り、全勝優勝で 4 連覇を達成した。体格差をものもしない持ち前のスピード、ディフェンスの不意を突き小気味よく決めるシュートで、日本の目指すバスケットを体現した本

橋が本大会 MVP に輝いた。

その後、リーグ開始に伴う代表活動休止を経て、FIBA 女子オリンピック予選に向けて 11 月に活動を再開。日本代表候補選手に加え、現役復帰した吉田、5 人制初日本代表選出となる宮下ら直前のリーグにて顕著な活躍を見せた選手を新たに招集し、オリンピック予選に挑んだ。インド戦、チャイニーズ・タイペイ戦を危なげなく勝利し、最終戦は WNBA 所属選手も複数含まれる強力な布陣で参加していたオーストラリアに対して、序盤からテンポよく次々と加点して大量リードでオーストラリアの戦意を喪失させて 82-69 で快勝。アジアグループ B1 位で本大会を終えた。初代表の宮下が堂々たる活躍を見せ、トップパフォーマーランキング 1 位に輝くなど若手選手の存在も光った。

続く 2 月の FIBA 女子オリンピック予選に向けては、現役復帰した大崎や初代表の若い選手を候補選手として招集するなど底上げを図った。大会直前に宮澤を、大会開始後に高田を怪我で欠き万全の布陣では無い中、初戦スウェーデンに快勝したが、地力のある地元ベルギー、カナダとの戦いは非常に手ごわいものとなった。ベルギーには一時 18 点差まで突き放されたものの試合終了間際に 1 点差まで詰め寄るなど意地を見せ、カナダにも最後のワンプレイまで勝利の可能性を残したが 2 点差での惜敗となった。2019 年度新試合方式導入初年度であったものの、WJBL 並びに各チームの協力により幅広い選手起用可能となり、また、トム・ホーバス HC ならびにコーチングスタッフの一貫した指導方針により、代表経験値に差があっても日本の確たるスタイルをどのような選手構成でも発揮することができるまでチーム力の醸成が進み、アジアカップ 4 連覇を含むアジア内無敗という結果を残し、世界予選でも手ごたえを感じる事ができた充実したシーズンとなった。

またユニバーシアード日本代表チームは、金メダル獲得を目標に強化を図ったが、前大会よりも大会期間が約 2 か月早く、潤沢な準備を行うことはできなかった。本大会では迎えた準決勝アメリカ戦は序盤から日本が流れをつかみリードするが、終盤のアメリカの猛攻の前に劣勢となり逆転負けを喫した。3 位決定戦もポルトガルに試合終了間際に追いつかれて延長戦に至り、非常に悔しい敗戦となった。中田、永田など日本代表経験もあるタレントが揃っていたが、勝ち切ることの難しさを痛感させられた大会となった。

U19 日本代表チームは FIBA U19 ワールドカップに出場し、前回大会で果たせなかった 3 位入りを目指した。予選ラウンドから特に体格に劣るヨーロッパ各国の試合が続いたが堅守速攻でのしぎ、ベスト 8 まで駒を進めたが、特に体の強さと巧さを持ち合わせたベルギーに敗れベスト 4 入りを果たせず、また順位決定戦 2 戦も僅差の敗戦となり悔しい幕引きとなった。U18 日本代表は日韓中ジュニア交流競技会に出場し 2 勝 1 敗で終了。年度末のエントリーキャンプは新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止となった。U16 日本代表チームは、FIBA 女子 U16 アジア選手権に向けて強化活動を行ったが、大会開催地決定が越年する事態となりようやく 2020 年 4 月の開催が決まったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止となった。

<主な国際大会の成績>

- ・ FIBA 女子アジアカップ 2019 (インド・ベンガルール) 1 位
- ・ FIBA 女子オリンピック予選 (マレーシア・クアラルンプール) アジア B1 位
- ・ FIBA 女子オリンピック予選 (ベルギー・オステンド) ベルギー会場 3 位
- ・ 第 30 回ユニバーシアード競技大会 (イタリア・ナポリ) 4 位
- ・ FIBA 女子 U19 ワールドカップ (タイ・バンコク) 8 位

3. 男子 3x3 日本代表概況

2019 年度の 3x3 男子代表活動は、前年 9 月に発足したトーステン・ロイブル DC 体制のもと、最大の目標である東京 2020 でのメダル獲得に向けた強化を実施する最初のシーズンとなった。2019 年 2 月の代表選考会を経て、2019 年 5 月より 3x3 専門選手に加え、5 人制を専門とする選手を Bリーグ・大学・高校の各カテゴリーから 15 名招集し、東京 2020 に向けた強化活動をスタートさせた。今年度最初の国際大会となった FIBA 3x3 アジアカップ 2019 (中国・長沙市) では、15 名のメンバーの中から小林、藤高、保岡、杉浦ら 4 名の Bリーグの選手を起用し挑んだ大会であった。予選プール 2 位

で決勝トーナメントに挑むも、初戦で同大会優勝のオーストラリアに 14-21 で敗戦。3x3 の経験不足から目標であったアジア 1 位に至らず、7 位という成績で終わった。そして、この年の最大の目標であった 6 月の FIBA3x3 ワールドカップ 2019（オランダ・アムステルダム）に向けた更なる強化を図るため、チェコ遠征を実施。現地での大会参加などによる実践経験を経て、アジアカップからメンバー 2 名を入れ替えた落合、小松、小林、保岡の 4 名でワールドカップに臨んだ。予選リーグでは同大会 3 位となったポーランドやブラジルなどの欧米・南米勢からも勝利を挙げても、期間中の落合選手の負傷欠場など劣勢となり 15 位で大会を終えた。その後、既存の代表候補選手に加えて、帰化選手であるアイラ・ブラウン選手ら B リーガーを追加招集し、8 月以降も継続して強化合宿を実施した。

また U23 代表では、5 月から 7 月にかけて開催された FIBA3x3U23 ネーションズリーグにおいて、強豪ロシアに勝利するなどの成績を挙げた。U18 から飛び級での代表選出といった若手選手の台頭によって、アンダーカテゴリーからの底上げを示すことが出来た。それを裏付けるように 8 月に開催された FIBA3x3U18 アジアカップ（マレーシア・サイバージャヤ）では、小栗、三谷、横地、市川のメンバーで一試合平均 19.2 得点をマークし予選から全勝優勝。大会 MVP に横地選手が選出されるなど、世代別ながらアジアの舞台において高い実力を示した。2019 年 11 月に東京 2020 の開催国枠での出場が内定し、代表候補選手の更なる強化とともに、FIBA3x3 ランキングの個人ポイント獲得を目指し、継続的な強化を図っていく。

<主な国際大会の成績>

- ・ FIBA 3x3 アジアカップ 2019（中国・長沙市）7 位
- ・ FIBA 3x3 ワールドカップ 2019（オランダ・アムステルダム）15 位
- ・ FIBA 3x3 U23 ネーションズリーグ 2019（ツアー大会/アジア・ヨーロッパカンファレンス）3 位
- ・ FIBA 3x3U18 アジアカップ 2019（マレーシア・サイバージャヤ）優勝

4. 女子 3x3 日本代表概況

3x3 女子代表強化は、男子同様にトーステン・ロイブル DC 新体制のもと、最大の目標である東京 2020 への強化を加速させる年であり、2019 年 2 月～3 月の代表候補選考会を経て、2019 年 4 月に 3x3 専門選手に加えて、5 人制を専門とする選手を W リーグ・大学・高校から 16 名招集し、強化活動をスタートした。2 回の強化合宿を経て、W リーグ選手 4 名（篠崎、伊集、宮下、西岡）で挑んだ。予選プールは連勝で決勝トーナメント進出を決めるも、準決勝のカザフスタンとの一戦で惜敗し、最初の目標であったアジア 1 は達成できず 3 位で終了。その後、更なる強化を目的とした男女代表チェコ遠征を経て、アジアカップから 2 名のメンバーを入れ替え、伊集、宮下、馬瓜、栗林の 4 名で FIBA3x3 ワールドカップ 2019（オランダ・アムステルダム）へ参戦。オーストラリアなどの強豪国に対して、クロスゲームを演じるものの勝ち切ることができずいずれも惜敗。予選プール 1 勝 3 敗、15 位で大会を終えた。その後も、10 名の代表候補選手で継続的に強化活動を進めながら、本年度よりスタートした FIBA 主催の女子シニアナショナルチームのツアー大会である 3x3 ウーマンズシリーズにも参戦し、4 大会で優勝 1 回、準優勝 2 回、3 位 1 回と一定の結果を残した。

また 10 月に開催された FIBA3x3U23 ワールドカップでは、A 代表でも活躍した馬瓜、西岡、山本に加えて、今大会が公式戦初出場となった永田選手を起用し出場。予選プールから順当に勝ち進むと、決勝戦で前年度優勝のロシアとの激闘を制して、日本バスケットボール界初の世界一に輝いた。加えて U18 カテゴリーでも、6 月に開催された FIBA3x3U18 ワールドカップ（モンゴル・ウランバートル）5 位や、8 月開催の FIBA3x3U18 アジアカップ（マレーシア・サイバージャヤ）で準優勝を達成するなど、アンダーカテゴリーでも結果を残すことができた。2020 年は OQT で東京 2020 の出場権を獲得することが至上命題であり、その先の 2021 年に開催される東京オリンピックでもメダル獲得に向けた継続した強化を図っていく。

<主な国際大会の成績>

- ・ FIBA 3x3 アジアカップ 2019（中国・長沙市）3 位
- ・ FIBA 3x3 ワールドカップ 2019（オランダ・アムステルダム）14 位

- ・ FIBA 3x3 ウーマンシリーズ 2019（ツアー大会）優勝：1回 準優勝：2回 第3位：1回
- ・ FIBA 3x3 U23 ワールドカップ 2019（中国・蘭州市）優勝
- ・ FIBA 3x3 U23 ネーションズリーグ 2019（ツアー大会/アジア・ヨーロッパカンファレンス） 3位
- ・ FIBA 3x3 U18 ワールドカップ 2019（モンゴル・ウランバートル） 5位

II 育成

1. 選手育成事業概況

2019年度はナショナル育成センターとしてU13/U14/U15を実施した。参加選手は都道府県育成センターの成果であろう、さらに習得すべき内容の理解が進んでおりレベルアップした内容となった。ブロック育成センターとして2019年度よりU13/U18を中止し、U12のみを実施した。U12において代表スタッフである佐藤晃一氏、鈴木良和氏が実施した8ブロック（九州のみ台風・コロナウイルス問題により中止）全てに参加し講習を行い大変好評であった。ジュニアユースアカデミーの男子は対象カテゴリーをあげることが成果（U16・U18代表）に繋がった。女子においてもU16代表に選出される選手が複数おり、男女共に長身選手育成がアンダーカテゴリー代表候補と連動できていた。

都道府県育成センターは完全実施の年度であったが、U12/U14/U16各カテゴリーで準備を行い、組織体制、スケジュール調整を行った。

2. マンツーマン推進事業概況

2019年度はU15世代において全中ブロック大会においてコミッショナー講習会を実施し「心情をはさまず判定すること」「オフボールディフェンスのポジションビジョンを注意して見ること」を喚起し判定基準の統一化を図った。U12世代において「技術不足を罰しない」方針を確認した。

2020年度に向けて、「心情を加味せず現象面を捉えて判定すること」を継続して実施する。

3. 指導者養成事業概況

2019年度はコーチライセンス制度を改定し、1) ライセンス区分の再設定とカリキュラムの見直し、2) E級講習会でエラーニングの導入、3) E級永年制廃止、4) C級養成講習会の開催、5) A級・B級コーチ養成講習会の共通・専門科目一体実施、6) キッズインストラクター講習会の新設、7) ジュニエキスパートの講習会の新設を行った。

研修会については、都道府県にインテグリティに関するリフレッシュ研修会の内容を展開するとともに、講師派遣を行った。また、例年通りコーチクリニックとコーチカンファレンスを実施したが、コーチカンファレンスでは初めて男女の日本代表ヘッドコーチが登壇し、世界のトレンドに関する情報を登録コーチに向けて発信した。全国指導者養成委員長会議では、従来の情報伝達形式からワークショップ形式に変更し、参加者の主体的な取り組みを促す試みを実施した。

III 競技会

1. 国内競技会概況

JBA主催主管の4大会に関し、天皇杯・皇后杯およびウインターカップは、無事に開催することが出来たが、ジュニアオールスターの後継となるU15プレ大会および全国ミニは、ぎりぎりまで開催の可能性を検討したが、新型コロナウイルス感染拡大に抛り、残念ながら中止という苦渋の選択をせざるを得ない結果となった。

天皇杯決勝は、今大会も残り数秒まで勝負の行方が分からない好ゲームとなった。またファイナルラウンド4日間の有料観客数は前年度比14%アップすることが出来た。しかしながら女子の試合のみの大会2日目に関しては、前年度とあまり相違ない有料観客数となり低調に推移した。今年度は天皇杯と皇后杯の開催時期も異なるため、特に皇后杯のプロモーションには注力し、大会全体プレゼンスのボトムアップを図っていきたい。

ウインターカップに於いては、今年度もソフトバンク社と共同事業スキームを採択し、協賛社獲得増やテレビ朝日グループで

の地上波・BS 放送の継続を実現することが出来た。長年本大会に協賛いただいていた NIKE が撤退してしまったが、新たに日清食品が協賛社に加わった。また八村塁選手の大会アンバサダー就任が、大会の盛り上げの一助となった。

2. 国際競技会（国内開催）概況

JBA 主管の国際競技会としては、男女日本代表の国際強化試合を実施した。女子代表の水戸大会に於いては、茨城ロボッツの新アリーナとなるアグストリアみとアリーナで強豪国ベルギー相手に見事 2 連勝を飾ることが出来た。また、埼玉大会に於いては、「International Basketball Games 2019」と称した大会とし、男子代表と同日の開催となりたくさんの観客の入ったさいたまアリーナで、チャイニーズ・タイペイ相手に 2 試合とも大差で勝利することが出来た。一方男子代表に於いては、NBA で活躍する八村、渡邊の出場も叶い、全ての試合にテレビ中継がなされた。競技面では強豪アルゼンチンとも互角に戦い、格上ドイツを破るなど世界と戦えるレベルを見せ、また集客面でもさいたまスーパーアリーナはじめ、いずれのアリーナも満員になるほど、かつてない盛り上がりを見せた。

IV 審判

1. 審判事業概況

2016 年度の審判ライセンスの国内統一移行後、審判ライセンス取得者は今年度で 56,000 人を突破し、2015 年度比較で約 770%増となった。また、2019 年度から審判インストラクター制度が完全実施となり、T 級 26 名、1 級 76 名、2 級 282 名、3 級 2,599 名、合計 2,983 名が取得した。今後、JBA として同じ判定基準、メカニック等を全国に伝達できるよう、審判インストラクター制度を充実させていきたい。さらに、全国大会においては 3PO 実施に向け各連盟等と協議し、普及を目的とした大会を除き、2019 年度から全大会で 3PO 実施となった。これに伴い、A 級審判員のレベルアップに今後取り組んでいく必要がある。

2017 年度に JBA 公認としては初のプロフェッショナルレフェリーが誕生し、トップリーグ審判を中心に活動を行い、また FIBA 主催大会で活躍しているが、本年度 2 人目のプロフェッショナルレフェリーが誕生した。

3x3 においては、審判員登録制度として 3x3 審判員の普及育成強化を進めた。またトップリーグ担当審判選考会も実施し、50 名程度を選出した。今後さらなる普及育成強化を果たすため、5 対 5 同様 3x3 プレーコーリング・ガイドラインを作成し、またガイドラインに沿った映像作成により、判定基準の統一化を果たしていきたい。

2017 年度から 6~8 月に実施しているブロック連携会議（各ブロックの方々との意見交換会）は、JBA 審判の方向性、事業の考え方を伝え、また各ブロック・都道府県の声を直接聞く事ができる非常に意義のある会であると感じている。各種改革を JBA と都道府県が同じ方向で進めていくためにも今後も継続して実施したい。

V 普及

1. 普及事業概況

これまで継続的に行っているドーピング・コントロールおよびドーピング防止教育・啓発活動の実施の他、本年度はインテグリティ委員会の設立に伴い、全国へ【クリーンバスケット・クリーンザゲーム～暴力暴言根絶】のメッセージを発信し、実態把握のため大会試合におけるテクニカル調査を実施した。

キッズインストラクターというライセンスを新設し、まだバスケットボールに触れていない子どもたちから体を動かすことの楽しさを伝えることができるカリキュラムを作成するとともに、実際に指導することができる人材の養成を開始した。

その他、バスケットゴール増設プロジェクトを行っているが、今後寄付の増加にむけた推進を検討する。

VI 3x3

1. 3x3 国内大会概況

第 6 回 3x3U18 日本選手権大会に関しては、2019 年 11 月末に大森ベルポートにて実施し、高校生らしい白熱した

試合展開で大盛況であった。第 5 回 3x3 日本選手権大会は 2020 年 2 月末に大森ベルポートにて実施し、男子優勝チームが 4 月に開催される「FIBA3x3 World Tour Doha Masters (カタル/ドーハ)」の出場権を獲得したが、コロナウイルスのため大会が凍結（延期日未定）された。

一方、普及・育成強化を目的とした JAPAN TOUR においては、「CHALLENGE」、「OPEN」、「EXTREME」の 3 カテゴリーを 4 月～1 月に実施した。「OPEN」カテゴリーの Round.1～10 にてポイント上位 1 チームへは 9 月に開催された FIBA3x3Seoul Challenger への出場権を与えた。「EXTREME」カテゴリーの Round.1～5 にてポイント上位 1 チームへは 10 月に開催された FIBA3x3World Tour Jeddah Masters (サウジアラビア/ジエッダ) への出場権を与えた。3 カテゴリーとも昨年度よりも参加チームも増え、特に普及のグラスルーツである「CHALLENGE・OPEN」両カテゴリーを主管した PBA にはツールとしてとても評価が高かった。引き続き次年度も継続して展開し、競技者と競技力向上を図りたい。

2. 3x3 競技振興事業概況

東京 2020 に向けた NTO および Stats 各メンバーの現地トレーニングを 4 月～2 月までの間、JAPAN TOUR・日本選手権大会・PREMIER.EXE (JBA 公認リーグ) にて実施し、東京 2020 へ派遣するメンバーの選考を行った。

東京 2020 延期のため、派遣予定メンバーについては継続してトレーニングを実施し、来る 2021 に向けて準備を行う。

Ⅶ 出版物等販売事業

1. 出版物等販売事業概況

2019 年度は、FIBA 競技規則「Official Basketball Rules 2018」の 2019 年 4 月 1 日からの国内適用に応じた 2019 年度版競技規則書 (ルールブック) を販売すると同時に、JBA 公式サイト上にも競技規則書の全文を公開したが、販売数に有意な影響は見られなかった。

また、FIBA ルール改変に応じた公式スコアシートの改訂版を、2019 年 3 月より販売開始し、2019 年 4 月 1 日以降の競技会から順次導入した。

Ⅷ 認定および登録管理

1. コーチライセンス概況

S 級～E-2 級、S (F) 級～B (F) 級までの認定を実施。登録数は前年度比 10,557 人増 (121.1%) の 60,625 人となった。

<コーチ登録数> (単位: 人)

S 級※	A 級※	B 級※	C 級	D 級	E-1 級	E-2 級	E 級	合計
102	221	945	11,684	10,355	12,890	15,799	8,626	60,625

※ S (F) 級、A (F) 級、B (F) 級コーチを含む

2. 審判ライセンス概況

2019 年 3 月 1 日時点で審判ライセンス取得者 (登録数) は前年度比 6,346 人増 (112.6%) の 56,552 人となり、新ライセンスシステム移行前の 2015 年末 (7,347 人) と比較し、49,205 人増 (770%) となった。

また 2019 年度から審判インストラクター制度完全実施となった。

<審判登録数> (単位: 人)

S 級	A 級	B 級	C 級	D 級	E 級	合計
138	276	5,070	9,096	15,692	26,280	56,552

<審判インストラクター登録数> (単位: 人)

T級	1級	2級	3級	合計
26	76	282	2,599	2,983

3. 役員、審判、コーチ、チーム、競技者（3x3を含む）の登録概況

チーム加盟数において、U15（中学カテゴリー）においてのチーム・競技者の減少が目立った。今後、教員の働き方改革へ向けた対策も検討する必要がある。審判・コーチ登録はのびている。

	2019年度	2018年度	前年度比	
チーム	34,039 チーム	34,427 チーム	98.9%	▲388
競技者	597,375 人	622,506 人	96.0%	▲25,131
3x3 競技者	1,228 人	868 人	141.5%	+360
審判	56,522 人	50,206 人	112.6%	+6,346
コーチ	60,625 人	50,068 人	121.1%	+10,557

IX 組織運営

1. 諸会議の開催、運営概況

評議員会、理事会といった公益法人としての必置機関の運営面においては、例年 3 月に開催していた臨時評議員会を、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、2020 年 4 月（2020 年度 4-6 月期）に延期することとなった。

その他、専門委員会、特別委員会、大会実施委員会等各種委員会の活動概況としては、2018 年度に新たに設置されたインテグリティ委員会において、引き続き当該委員会を中心とした暴力・暴言根絶を目的とした諸活動を推進したほか、国内競技環境の中長期方針を検討するために（期限を設けず）設置された特別委員会・将来構想委員会において、2018 年度に引き続き、男女トップリーグや天皇杯等の中長期的な開催方針の立案に向けた協議が継続されたこと、また、2018 年度に裁定・規律関連規程の整備を行った影響から、各都道府県協会の裁定機関から JBA 裁定委員会に移管される案件が増加し、裁定委員会が活発に開催されたことなどが特筆される。

2. アンダーカテゴリー部会の運営概況

アンダーカテゴリー部会を組織してから 2 年目を迎えた 2019 年度は、U12/U15/U18 の各カテゴリーの諸活動および諸課題解決へ向けて、執行会議、各種グループ会議をはじめとする各カテゴリー部会の会議体の運営の他、都道府県協会各部長との連携、各カテゴリーのホームページで情報発信を行い、組織機能の強化を図った。

U12 カテゴリー部会では、日本ミニ連との併走状態から、2020 年度からの組織・名称の完全一元化へ向けた移行期間として、組織体制、規程類、事業の見直しを行った。特に、登録・移籍の規程に関しては、U12 カテゴリーの登録運用細則および移籍運用細則を設け、全国統一した運用にした。また、初めてブロック別連絡会議を開催し、都道府県リーグ戦の推進を図るとともに、今後の U12 世代における競技環境の整備についての方針を伝達し、都道府県における競技環境の充実を図った。

U15 カテゴリー部会では、全国 U15 選手権大会（2019 年度はプレ大会）の新設および都道府県におけるリーグ戦化の実施年度であり、U15 カテゴリーの競技環境整備へ向けて動き出した 1 年となった。また、U15 カテゴリーの登録運用細則および移籍運用細則を設け、全国統一した運用にした。

U18 カテゴリー部会では、11 月より本格的に組織が始動し、トップ・ブロックリーグ構想や都道府県リーグ戦化など、U18 世代の競技環境の整備・充実に向けて検討を行った。

3. D-fund 制度の運用概況

2019年度のD-fund制度運用は、2018年度の申請状況を踏まえ、新たに対象事業に上限枠を設定し、各事業における受益者負担割合や、収支バランスの改善を図った。

制度開始から2年目を迎え、各都道府県協会の申請や報告手続きに関する作業効率は1年目より向上してきており、また、各都道府県内における財務基盤体制も一元化されつつあることから、各都道府県協会の組織運営面におけるガバナンスが確立されてきていることが、D-fund制度を通じて見て取ることができた。

なお、最終的なD-fund交付金額の確定に際しては、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、対象事業の中止が相次いだこともあり、5千万円強の返金額が発生した。

今後の課題としては、各都道府県協会の申請・報告手続きの更なる効率化、報告書提出時期の徹底等が挙げられる。また、D-fundと紐づき、都道府県協会の運営実態を確認・評価できるような制度の導入も検討していくこととしたい。

4. 国際関連活動概況

2019年度は、FIBAおよびFIBA Asiaの改選期であったため、日本から理事選出に向けロビー活動等を行った。FIBAおよびFIBA Asiaとの良好な関係を構築したことにより、三屋裕子JBA会長が2019年8月30日のFIBA総会にて実施された選挙にて再選を果たした。FIBA センtralボードに選出されたことにより、FIBA Asia 理事にも自動的に任命された。

また、スポーツ庁、JOCが推奨するIF/AFのポスト獲得にも注力しており、JBAはFIBAおよびFIBA Asiaの委員会のポスト獲得に成功。(FIBA委員2名、FIBA Asia委員3名)

2020東京オリンピックに向けたテストイベントを2019年8月にさいたまスーパーアリーナにて開催したが、FIBAワールドカップ2019準優勝アルゼンチンを筆頭にドイツ、チュニジアという強豪国を招聘することが出来た。女子は開催時期の問題もあり、強豪国を招聘することは出来なかったが、チャイニーズ・タイペイを招聘し、強化試合を行った。2019年度はオリンピックに向けた強化活動のため、密に男女代表グループと連携し、円滑にマッチメイクを行い、来日した海外チームに対してもしっかりと対応することが出来たと考える。

2019年度は先述の通り、IF/AFでのポスト獲得が大きな使命でもあったため、目標は達成したと考える。一方、2020東京オリンピック中止に伴い、代表強化の計画を変更せざるを得ない状況となる。国際としてはFIBA、FIBA Asia、他国NFとのコミュニケーションを図り、円滑に準備が進められる体制を維持しなければならない。

また、FIBAは女子バスケットボールおよびクラブ選手権の強化・発展を目指しており、JBAとしてもしっかりと情報を収集しながら日本国内における女子バスケットボール・リーグの発展・強化に向け、情報共有していくことが非常に重要になると考えている。

X 広報

1. 広報活動概況

日本代表活動や各種全国大会、国際大会等に関する情報発信を中心に、情報展開および露出拡大を図った。特に、NBA選手となった八村塁選手、渡邊雄太選手らが参加した男子日本代表のワールドカップについては、本大会での結果こそ全敗での予選ラウンド敗退となったが、国内的な盛り上がりを作ることに成功、男子代表活動に関する広報・プロモーションを行ううえで、ファン層の拡大を含めた更なる国内環境の強化ができたと考える。

一方、女子日本代表は、アジアカップ4連覇(アジア選手権時代を含む)を達成するなど、近年安定した好戦績を収めており、オリンピックへ向けてメディアの注目度は高水準にてキープしている。すでに東京オリンピックの出場権も獲得し、「金メダル獲得」を目標とすることから、オリンピックに関連した広報・プロモーション活動を推進中である。

3x3については、ディアにおいて3x3担当者が配されるなど、徐々に注目度が上がっている状況で、メディアとの協働も含めて、さまざまな広報・プロモーション施策にチャレンジできる段階に入った。アンダーカテゴリーではあるが、女子のU23日本代表が5人制、3人制を問わず、日本史上初の世界大会(ワールドカップ)優勝を果たしたことも追い風になった。

周知のとおり、2020年2月以降、新型コロナウイルス感染症の世界的パンデミックの影響により、男子日本代表のアジアカップ2021予選や3x3のオリンピック予選等も延期となった。国内においても「U15日本選手権プレ大会」「全国ミニバス大会」等の事業が中止となり、広報・プロモーション機会という点では、いくつかのチャンスを失う形にはなったが、2020年度については、2021年夏に延期された東京オリンピックに向けた日本代表チームの活動はもとより、アンダーカテゴリー代表、各種大会、育成や審判関連事業など、あらゆる視点から改めてバスケットボールの価値向上・認知度アップにつなげていけるよう努めたい。